

清々しく山路を寮に歸る。舍前に集合して朝禮を行ふ。國旗掲揚、遙拜、國歌奉唱、道場長訓示、御製奉唱で終るのであるが、御製奉唱の聲は山々の彼方へ木魂して實に嚴肅である。七時になると待望の魚盤が鳴る。皆活々として食堂に入り神拜の後食事を採る。食事は一切無言で食器の音を立てる事すら許されない。全員食べ終つた時に食後の禮を行ひ食器の整頓を濟ませて部屋に歸る。八時より清掃、八時三十分より作業に掛る。今日は木炭用材の伐採作業であつた。手頃な立木を大斧で切るのは愉快だつた。十二時になると炊事當番が山路をふみ分けて辨當を持つて來て呉れる。晝は原則として戸外で食べるのださうだ。澤庵と梅千丈けであるが空腹の爲め實に美味い。十三時より又作業、四時に終了して歸寮——四時三十分夕禮である。君が代の代りに夕禮の折は海ゆかばを齊唱し、大君の御楯とならん事を誓ふ。十七時より一時間で入浴をする。浴場と云つても野戰を偲ばせる様な定員四人の風呂、全員入浴が終る頃は湯なんかないものではない。

今日は午後六時の夕食後、帝國治水協會長殿より訓話あり、一同感激を新にし二十一時より靜座、二十一時半消燈して就寢す。奥多摩は夜は少し寒い様だ。

七月廿六日。今日の作業は他の者は開墾やら伐採をやつて居たが、僕は鋸の柄を作る。木工は十八番なので仲々巧くやれて愉快だつた。午後七時より文部省より來られた視學官兵務局氣付の田村大佐を團んで座談會などあつた。此の座談會で最も深く感じた事は現在の青年が宗教に關してどれ位の關心を持つてゐるかと云ふ事で、我々としては例へば禪宗の碧巖錄などの研究と共に日常の儀式などに就いての氣付かない様な方面も研究して置かなければ鼎の輕重を問はれる様な結果になるのではなからうかと云ふことである。これと共に全國の我々と同じ様な大學高專生が如何に從來の傳統……或は因習……を捨て、新しく出發して居るか今にして我々が覺醒しなければ結局世間をリードすべき我々が却つてリードされるのではなからうか。今日の座談會は非常に有益だつた。

七月三十日。愈々今日は退寮の日である。一週間の色々な思出が懐かしい。歸れる喜びと名残り惜しさが交々至る、午前九時記念撮影を濟まして退寮式を行ひ文部大臣より「よくやつた、今後共頑張り」との御訓示あり、太田場長より「諸君はよくやつた、諸君と別れるのは本當に名残惜しい」と涙ながらに訓示された時は全員涙を流して無言の誓をし、終つて十一時前旅裝を整へて寮を後にした。寮長先生や諸先生、食堂の方々、それに日傭の半島同胞までがハンカチを振りながら見送つて呉れる。寮もだん／＼遠くなり木蔭にかくれた。では思源寮よ左様なら……。

北 邊 尾 隆 偶 立 感 立

あちらから歸つて學生以外の、所謂社會人の凡てはこんな事を平氣で云ふ、うどうせ學生の作業だもの大した事は無かつたんだらう」と。五年七年前の學生がお返し附けた影がそれらの人々から除けられない事は、吾等學生にとつては甚だ迷惑

な事である。我々は戦つてゐるのだ、自分は闘つてゐるんだ。社會人よ、目覺めよ!! 學生諸友よ、頑張らう!!!

夕燒の空を飛ぶ鳥も無ければ、吾家へ急ぐ人の影もない。「荒涼」たる北邊の日暮——六時二十分「作業止め」がかかる。だが直ぐ止める隊は無い。割當量が終らないのである。誰も何とも云はない。眼と瞳を交へて、ニツと笑つて互にうなづくだけの事である。そして凡そ物が見える程度の明るさのうちは作業が続けられる。「くそツ」「ええイ」えぐる様な聲だけの作業場である。蠟燭の仄明で夕食、板と筵の上に横になるのが九時過ぎ、だがかうした中でも、若さ、朗らかさを誇る自分達は、明日の力を求めて愉しく夢路に入る。四時起床、朝禮、故郷遙拜がある、他事かも知れないが北邊の地で行はれる此の行事は、自分を素直に、何だか、涙の出る様な氣持にした良い印象として残つてゐる、そして闘ひは始まる、異様な形の〇〇帽を着けて大自然との争ひは開かれる、斧を揮ふ者、殘根に喰ひ下る者、一層剥いだツンドラの更に次を

切る一人、腰近くまで冷い泥水に沈んでぐしよぬれのそれを掴み出す一人、地響と共にぶつ倒れる原始木、鈍く、而も鋭く光る鋏先き、この様にして貴いとも云へる〇が、一塊一塊と獲られて行く——凡てを打ちのめす様な雨、沁るトロツコそれにしがみ付く自分、支えてくれる戦友——而し見る、刻一寸、尺一刻と吾々の〇〇は延びるではないか、唯〇〇、〇〇だけだ!! 闘ひは続けられた。そして遂に吾々日本學生の信念と汗によつて、豫定の事業が完成されたのだ。

向ふでも感じ、歸つてから更に痛感するものは、學生の實踐力である。適當な詞かどうかわからないが「逞しきインテリ」でなければ斷じてこれだけの仕事は出来ないと思ふ。

海 中 に 島 鍛 亮 に 範

我々は去る七月三十日・三十一日の二日間舞鶴海兵團で訓練を受けた。言ふまでもなく我々若人にとつて意義深き生活であつた。各教官の御熱心なる御指導に依り、僅かながらも大きな結果を得たの

である。

海軍體操。早朝よりの此の體操は我々にとつては全くきつく感ぜられた。然ラヂオ體操では生ぬるい、海軍體操を通して苦難を恐れぬ膽の太い日本男子とならねばならぬ。

競漕。之は完全に全員が一致協力して櫓が揃はなければ、小さな八米のカッターさへ前進する事は出来ない。此の訓練に依つて不撓不屈の精神、協力一致の必要、職域における責任感が養はれるのである。

僅か二日間の訓練ではあつたが、規律正しい勇ましい訓練を受け、凜然たる海軍魂を把握し、概念的知識よりも體驗こそ最も尊ぶべきものであることを痛感した。世界の海は日本の海だ。海を知らんとするには海に出なければならぬ。今ぞ大和魂を海に生かし、海に現はす決戦の秋だ。若人の起つ時は來た。其の若さを海に捧げ戦ふ海へ若さを乗せて米英撃滅に征く時だ。小成の境域に踟躕する自我を蟬脱し、大乘の心魂を培ひ八紘爲宇の理念貫徹に邁進しようではないか。